

わたしの戦争体験

福岡市南区 池田 稔

私が旧制中学2年生の6月、戦局が極度に厳しくなり日本の敗色が濃くなったころだった。毎晩、警戒警報のサイレンが夜のしじまを破って鳴り響いた。『またか』といささか避難行動にうんざりしていた。自宅の部屋の天井板ははがされていた。何のための措置か、幼な心にも納得できなかつた。警戒警報が発令されれば自宅前の道路わきに造った自前の防空壕に入る。急ごしらえの貧弱な壕だから、爆弾が落ちればひとたまりもないシロモノだ。中は、じめっとしてカビくさい。警報が解除になるとノコノコと這い出す。こういう生活が毎晩繰り返された。畳の上で寝るときもズボンをはいたまま。もちろんゲートルも巻いたままである。

私たちの住居は当時福岡市六月田町というところで、周囲はびっしり家が建て込んだ住宅街の一角だった。我が家の人員構成は、父親は48歳で南方の戦場に駆り出された老兵で、母親と弟2人の4人家族だった。

その夜、すなわち昭和20年6月19日、まず警戒警報のサイレンが鳴った。幼いながらも私が不在の父親のあとを取り仕切る“家長”だから責任は重い。『また警戒警報が出たがたいしたことはなかろう』とタカをくくって弟たちと防空壕に入った。しかしすぐさま空襲警報に変わった。ふだんにはない緊張感が漂う。様子を見るため外へ出て、恐る恐る空を見上げた。その瞬間、空が真っ赤に染まり昼間のように明るくなった。焼夷弾が落とされて家々が燃えているようだ。『大変なことになったぞ』と直感した。『こんなとき父親がいてくれたら恐怖心も半減するのに』と、半分ベソをかきながら防空壕に飛び込んだ。

我が家から500mほど離れたところに映画館が2軒あった。そのひとつに焼夷弾が落ちたらしい。『こんな近くに落ちたのだから、我が家も当然焼かれてしまう』と、とっさに思った。恐ろしさが身内にジーンと走る。アメリカのB29戦闘爆撃機が大挙して来襲し、焼夷弾を落とすのだからたまったものではない。我が軍の応戦はない。なされるがままである。

ずいぶん時間が経過したころB29は目的を果たし、やっと去って行ってしまった。甚大な損害を与えて…。『ああ、助かった』と思ったとき、まだまだ生きられるとかすかな望みが湧いてきた。我が家の周囲は被害を免れたようで、いつものとおりの住家が建っていた。どこに行くところもない。情報が全く伝わってこないのでイライラが募るばかり。だれも自分のことで精一杯なのだ。我が町内は無事だったが、他所はどうなっているのか様子を知りたくて動き出したかったが、まずは夜の明けるのを待つことにした。

早朝、平尾のあたりまで行ってみた。焦げくさい匂いがあたり一面に立ちこめている。燃えてなくなった家跡があちこちにあり、様相が一変している。これから日本はどうなるのか、疑心暗鬼の状態に陥るばかりだ。露切町というところでは、女学生が道端に倒れ真っ黒に焼け焦げている。恐らく焼夷弾の直撃をまともに受けて亡くなったのだろう。悲惨きわまりない光景

に気持ちが悪くなるばかりだ。この女学生はこのような最期を迎えるとは到底考え及ばなかったことだろう。まだ若いので将来やりたいことが山ほどあったことだろう。この戦争はどうなっているのか、釈然としないものがあった。

渡辺通り一丁目の交差点近くに市内電車が焼けただれて線路に止まっている。眼を北の方角に移すと、これまたビックリした。電車通りの先の天神町、それから博多港の海まで見通せる。建物が焼き払われ、ふだん見えないところまで見えてしまったのだ。あとで知ったことだが、中心部の天神町一帯、旧博多部の町々や福岡部も大半が焼き尽くされた。我が家付近に被害がなかったのが不思議にさえ思えた。このなかで悲惨を極めたのは、土居町の銀行地下室に避難していた人たちだ。猛火に包まれて停電し、シャッターが開かなくなり、数多くの人々が閉じ込められて亡くなってしまった。この世には神も仏もないのか。『戦争はイヤだ。早く終わらなくて…』と真剣に考えてみた。負けて当然、日本の国力からみても連合国を敵に回しては勝ち目はない。おそらく誰でもが心の奥底で感じ取っていたのではないだろうか。

その証拠に食べもの、物資の不足に我慢を強いられた。日本は神国だから必ず勝つと軍部はずっと言い続けてきた。もう少し辛棒すればすべてが好転すると…。しかし食糧事情はますます悪くなるばかりだ。例えば私たち家族は、このころ米粒はほとんど口に入らず、雑炊かサツマイモ、ジャガイモをふかせたものばかり食べていた。学校では昼食のときが特に恥ずかしかった。田舎から来ていた生徒はいつも銀シャリ、私たち都会派は脱脂大豆をわずかの米や麦に混ぜて炊いたもので、弁当のフタを開くのがイヤだった。そっとフタを開け、あたりをはばかりるようにしてサッサと食べる。一刻も早く食べ終えて、残りの休み時間を遊びに興じ、渴き切った気持ちをいやすのだった。

もう少し深刻な話をすれば、肌着にシラミがわいてかゆくてたまらない。母親が肌着を脱がせてつぶしてくれたのを昨日のように覚えている。なにしろ風呂にもなかなか入れず、シラミがすみついてしまったのだ。風呂をたく石炭が不足し『よい湯だな』とはいかなかった。食糧は欠乏し、私達は飢餓状態に陥っていた。原子爆弾が落とされた後も戦争を続行していたら、日本は徹底的に打ちのめされ、あるいは消滅していたかも知れない。その直前で戦争が終結したのがせめてもの救いと考えなければ、亡くなった人々は浮かばれまい。

季節は夏に向かっていった。日本全土の都市はあらかた焼かれ焦土と化していた。暑い日が続き、希望もなくただ生きているだけ。そして運命の昭和20年8月6日広島に、9日長崎に原子爆弾が投下され、日本は壊滅の様相を呈した。ついに8月15日、天皇のポツダム宣言受諾で無条件降伏した。平和がいかに大切なことか。日本国民は骨身にしみて感じたことだろう。

今、日本は民主主義の平和国家に生まれ変わって半世紀を迎えようとしている。平和のありがたさをかみしめ、二度と戦争を起こしてはならないと肝に銘ずべきだ。しかし現在の日本は55年体制がくずれ、政治も暗たんとして先が見えない。また阪神大震災や地下鉄サリン事件、オウム真理教事件など、たて続けにいやなことが起こっている。国民の一人一人が真剣に考え直し、そして反省しなければならない時期に来ていると痛感している。